

プランタでも育てられる おんぼのコンテナ菜園

写真・文：園芸研究家●淡野一郎

ダイコン(秋まき)

秋まきで旬のダイコンを収穫 培養土の袋をそのまま活用

根が長くて大きなダイコン。コンテナでの栽培は一見難しそうに思えますが、青首ダイコンなら、青首部分は地上に出ていて、根は意外と短いので、30cmほどの土の深さが確保できれば栽培できます。特に培養土の袋(14~20L)は、高さも変えられ栽培にはもってこいです。

冷涼な気候を好みますが、30度ぐらいの暑さでも発芽でき、生育に従い適温は徐々に下がるため、種まきは冬に向け気温が徐々に下がる9月上旬~10月中旬が一番適しています。害虫の多い初期は防虫し、葉の数を増やす頃と根を太らせる頃には追肥しましょう。

秋まき用の品種には年内収穫する秋冬採り、年明け前後に収穫する冬採り、年明け後に収穫する越冬採りがあります。収穫時期に応じた品種を選ぶことも大切です。



写真 ©ICHIRO AWANO

秋冬採りの青首ダイコン品種
「冬自慢」

【基本情報】

- 分類：アブラナ科ダイコン属
- 好適pH：5.5~6.8
- 原産地：地中海、中央アジアなど諸説
- 日当たり：日なた
- 発芽適温(地温)：24~28度
- 生育適温(気温)：17~20度

【病虫害情報】

キスジノミハムシ：秋まきで10月上旬まで発生し、幼虫が根を食害する。防虫ネットは目が1mm以下のものを使う。

ダイコンシンクイムシ(ハイマダラノメイガの幼虫)、**アブラムシ**類：気温の高い栽培初期は、害虫が付しやすい。

ダイコンの栽培方法

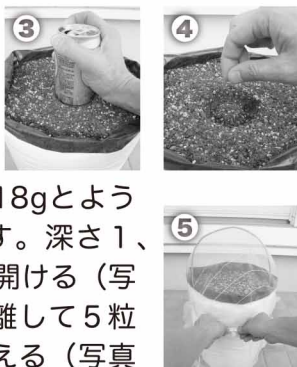
1 種まき準備

培養土の袋(14L以上)の底の両端を寄せ、結束バンドで結ぶ(写真1)。箸などを使って袋の底に水抜き穴を数カ所開ける。袋をひっくり返し、封を開け、縁を巻き下げればコンテナができる(写真2)。



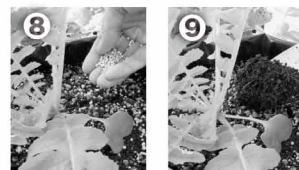
2 種まき

土を全て袋から出し、増し土用に1L分をよける。残りの土に化成肥料(NPK各成分8-8-8)約18gとよりん約3gを混ぜ袋に戻す。深さ1、2cmのまき穴を空き缶で開ける(写真3)。穴の周囲へ種を離して5粒まき、土をかけ手で押さえる(写真4)。袋の底から水が出るまで、ジョウロでゆっくり水やりする。



4 増し土と2、3回の追肥

本葉5、6枚から葉の数を増やし始めるので、株から離して化成肥料(8-8-8)約5gを施し(写真8)、土と混ぜる。



このとき、袋の縁を上げて、種まきの際によけた土1L分を足す(写真9)。2回目はさらに約2週間後、根が太り始め本葉15~20枚の頃に同量を追肥する。9月下旬に種まきした場合や冬採り品種は、耐寒性を高めるため1カ月後に同量を追肥する。

5 収穫

秋冬採り品種で種まき後65~85日、冬採り品種で90~130日ほど。葉が垂れ、中心部分の葉が開いてきたら収穫する(写真10)。



ポイント 防虫のため種まき直後に支柱を渡し、上から防虫ネットをかけ、ひもで縛る(写真5)。

3 間引き(2回)

最初の間引きは種まき後約1週間で、子葉が十分に開いたら3株にする(写真6)。間引き後は防虫ネットを再びかける。2回目はさらに約2週間後の本葉4、5枚ではさみを使い1株にする(写真7)。この頃、防虫ネットは外す。



ポイント 子葉の数や形、色が異なり、出芽の早晚が強い株、特に2回目は子葉の下(胚軸)が地面から極端に出た株を間引く。

栽培カレンダー

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
寒地												
寒冷地												
温暖地												
暖地												

●種まき - - - - 保温 ■収穫

※温暖地を基準に記事を作成しています。